

尼たちへの消息

——よく生きよとの——

長谷川時雨

青空文庫

日蓮聖人の消息文せうそくぶんの中から、尼御前あまごぜたちに對あたへられた書簡を拾つてゆくと、安産の護符ふをおくられたり、生れた子に命名したりしてゐて、哲人日蓮、大詩人日蓮の風貌躍如として、六百六十餘年の世をへだてた今日、親しく語りかけられる心地がする。もとよりこの尼御前あまごぜたちは在家ざいけの尼たちであるが、送られた手紙は、文章も簡潔で實に好い。それよりもよいのは、寄進きしんされた品目ひんもくをいつも頭初はじめに書いて、感謝してゐる率直な表現だ。もとより私の見方は、文章の上から見てのことばかりだが、後に多くの文雅ぶんがの士しがさうした書きかたをしたのを見ると、これを學んだのでないかと思ふほどだ。文中景色を叙したのはすくないが、駿河の松野殿まつのどのごへんじ御返事といふ一文には、
 鷺目うもく一結ひとゆひ、白米しらよね一駄だ、白小袖一だ、送り給ひ畢をはんぬ。抑そもく、此山と申すは、南は野山漫々まんくとして百餘里に及び、北は身延山高く峙ちて白根が嶽につづき、西には七面めんと申す山峨々がくとして白雪絶えず、人の住家一字うもなし、適たま、問ひくるものとは稍を傳ましらふ猿さるなれば、少も留すこしとどまることなく還かへるさ急ぐ恨みなる哉。東は富士河漲みなぎりて流沙りうさの浪に異ならず。かかる所なれば訪おもふ人も希まれなるに、加様かやうに度々たびく音信おんしんせさせ給ふ事、不思議の中の不思議也。

これは、建治二年十二月九日に身延から佛道の教へに答へられた長い書簡の書出しである。

おなじ松野殿へ、弘安元年五月一日に與へられたのには、

日月は地におち、須彌山はくづるとも、彼女女人、佛に成らせ給ん事疑なし。あらたのもしや、たのもしや
干飯一斗、古酒一筒、ちまき、あうぎし（青麩）、たかな（筍）方々の物
送り給ふて候。草にさける花、木の皮を香として佛に奉る人、靈鷲山へ參らざるはなし。況や、民のほねをくだける白米、人の血をしぼれる如くなるふるさきを、佛法華經にまいらせ給へる女人の、成佛得道疑べしや。

これは全文である。この、況や民の骨をくだける白米、人の血を絞れるとき古酒、といふ言葉は白米が玉のやうに、白光りに光つて見える。民の骨を碎ける白米、民の骨を碎ける白米！ げに有難い言葉ではないか。

この松野殿女房——後家尼御前に與へられた、も一通の消息にも身延隱棲の自然が叙されてある。

麥一箱、いゑのいも（里芋）一籠、うり一籠、旁の物、六月三日に給ひ候ひしを、
 今迄御返事申候はざりし事恐入候。此身延の澤と申す處は、甲斐の國飯井野、御
 牧、波木井三箇郷の内、波木井郷の戊亥の隅にあたりて候。北には身延嶽天をいた
 だき、南には鷹取が嶽雲につづき、東には天子の嶽日とたけをなじ、西には又、峨
 々として大山つづきて白根の嶽にわたれり。猿のなく音天に響き、蟬のさえづり地に
 みてり。天竺の靈山此處に來れり。唐土の天台山親りここに見る。我が身は釋
 迦佛にあらず、天台大師にてはなし。然れども晝夜に法華經をよみ、朝暮に摩訶止
 觀を談ずれば、靈山淨土にも相似たり。天台山にも異ならず。但し有待の依身なれば、
 著ざれば風身にしみ、食ざれば命持ちがたし。燈に油をつがず、火に薪を加へざるが
 如し。命いかでかつぐべきやらん。命續きがたく、つぐべき力絶ては、或は一日乃至
 五日、既に法華經讀誦の音も絶へぬべし。止觀の窓の前には草しげりなん。か
 くの如く候に、いかにして思ひ寄せ給ひぬならん。兎は經行の者を供養せしか
 ば、天帝哀みをなして、月の中にをかせ給ひぬ。今、天を仰ぎ見るに月の中に兎あり。
 されば女人の御身として、かかる濁世末代に、法華經を供養しましませば、梵

王も天眼を以て御覽じ、帝釋は掌を合せてをがませたまひ、地神は御足をいただきて喜び、釋迦佛は靈山より御手をのべて、御頂をなでさせ給ふらん、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。恐々謹言

これは弘安二年己卯六月二十日に書かれたものだ。

窪の尼は、窪の持妙尼とよばれて、松野殿後家尼御前の娘だが、武州池上宗仲の室、日女御前と同じ人であらうともいふ。弘安二年以後、日蓮聖人五十七歳ごろから六十歳ごろまでにおくられた消息の中に、

すずの（種々）御供養、送給畢。大風の草をなびかし、雷の人ををどろかすやうに候。よの中に、いかにいままで御信用候けるふしぎさよ。ねふか（根深）ければ葉かれず、いづみ（泉）玉あれば水たえずと申やうに、御信念のねのふかくいさぎよき玉の、心のうちにわたらせ給歟、たうとし、たうとし。恐々。

六月二十七日（弘安元年）

同二年十二月二十七日は、尼が初春の料の餅をおくつたと見えて、

十字（蒸餅）五十まい、くしがき一れん、あめをけ（飴桶）一、送給畢。

御心ざしきざきかきつくして、筆もつひゆびもたたぬ。三千世界に七日ふる雨のかずはかずへつくしてん。十萬世界の大地のちりは知人もありなん。法華經一字供養の功德は知がたしとこそ佛はとかせ給て候へ、此をもて御心あるべし。

と禮を述べ、その前月、十一月二日の日附けで、持妙尼御前名宛には、御膳料を送られたので、亡入道殿（持妙尼の夫）の命日であつたかと、とかう紛れて、打忘れてゐたが、なるほど、そちらでは忘れない筈だと、昔、漢王の使で胡國に行つた夫に、十九年も別れてゐた蘇武の妻が、秋になると夫の衣を砧で打つその思ひが、遠く離れてゐた蘇武にきこえたといふことや、陳子は夫婦の別れに鏡を割つて一つづつ取り、妻が夫を忘れたときに鏡の破片が鵲になつて夫に告げたといふことや、相思といふ女が男を戀ひ慕つて墓へ参り、木となつてしまつたが、それが相思樹といふのだとか、大唐へ渡る道に志賀の明神といふのがあるが、男が唐へいつたのを慕つた女が神となつたが、その島の姿が女に似てゐる。それが松浦佐夜姫であるとか、昔から今まで、親子の別れ、主従のわかれ、いづれも愁いが、男女の死別ほどのはあるまいなどといはれてゐる。

けれど、そこまでは慰めであつて慰めでなく、そのあとの少しばかりが、眞に尼御前にいはれようとした眼目だつたのだ。

——御身は過去遠々より女の身であつたが、この男（入道）が娑婆での最後で、御前には善智識だから、思ひだす度ごとに法華經の題目をとなへまゐらせよ。と、二首の歌も書かれてある。

ちりし花　をちしこのみもさきむすぶ　などかは人の返らざるらむ

こぞもうく　ことしもつらき月日かな　おもひはいつもはれぬものゆゑ

この文のなかの、娑婆での最後とは、彼女が夫入道の道心によつて、在家の尼となり出家し、法華經を信じ奉ずるために「女人成佛」といふ、むづかしい教理がふくまれてゐるのであらうが、弘安三年五月三日の窪尼あての文の頭書などは、景情そなはつてとてもよい書き出しだ。

ちまきはたかなぼん、ちひ 粽五把、ちひ 第十本、ひとづつ 千日（酒）一筒、たびをはんぬ 給畢。いつもの事にて候へども、ながあめふりて夏の日ながし。山はふかく、みちしげければ、ふみわくる人も候はぬに、ほととぎすにつけての御おんひとこゑ、ありがたし、ありがたし——

文永八年五月七日（今から六百六十四年前）に、しでうきんごよりもと四條金吾頼基の夫人の出産前に書かれた消息などは、女人のことといへば、表向きは済ましかへるがならひの僧侶など、恥死はぢしんでもよいほど潤達な、ありのままに出産の悦びを表してゐるものだ。

四條金吾は鎌倉幕府の江馬入道につかへた武士で、當時四面楚歌の日蓮に師事し、法華經信者の随一ともいへる若人わかうどだ。金吾は日蓮龍の口法難のをりは、自分も腹を切らうとした無垢純粹の歸依者きえしやだ。その妻は日眼女にちがんによといひ、夫におとらぬ志を持した人で、この女房ふじんが年廿八の出産のをりに、

懷胎くわいたいのよし承候うけたまはりさふらひぬ畢ひ。

それについては符ふの事こと仰あふ候せさふらふ。日蓮相承にちれんさうしようの中より撰えらみ出して候。能々よくよく信心あるべく候。たとへば、祕藥ひやくなりとも、毒を入ぬれば藥用くすりのようすくなし。つるぎなれども、わるびれたる人ひとのためには何かなにせん。就中なかんづく、夫婦共に法華ほつけの持者ぢしやなり也。法華經流布るふあるべきたねをつぐ所の、玉の子出生うまざうち、目出度覺候めだつゝぞ。色心しきしん二法にほふをつぐ人ひなり也。争いかでかをそなはり候さふらふべき。とくとくこそ生うまれ候はむずれ。此藥このくすりをのませ給はば、疑ななかるべき也。闇やみなれども、燈入ひいりぬれば明あきらかなり。濁水だくすゐにも月入つきいりぬればすめり。

あきつ
明かなる事日月にすぎんや。淨き事蓮華にまさるべきや。法華經は日月と蓮華な
り。故に妙法蓮華經と名く。日蓮又日月と蓮華との如くなり。信心の水すまば
利生の月必ず應を垂れ、守護し給べし。とくとく生れ候べし。法華經云如是妙
法、又云、安樂產福子云々。口傳相承の事は、此辨公（註・使僧日昭）
にくはしく申ふくめて候。則、如來使なるべし。返々も信心候べし。天照
大神は玉をそさのをのみこにさづけて、玉の如くの子をまふけたり。然間、日の
神、我子となづけたり。さてこそ正哉吾勝とは名けたれ。日蓮うまるべき種をなづけ
て候へば、争か我子にとるべき、有一寶珠價值三千等、無上寶聚不求自得。
釋迦如來皆是吾子等云々。日蓮あにこの義にかはるべきや。幸なり、幸なり、めで
たし、めでたし、又々申べく候。あなかしこ、あなかしこ。

護符——藥の功德あらはれてか、その手紙のあつた翌日、五月八日に女子が生れたので、
早速名づけ親になられたのだ。

若童生れさせ給由承候。目出たく覺へ候。誠に今日は八日にて候も、
彼と云此と云、所願しほ（潮）の指す如く、春の野に華の開けるが如し。然れば、

いそぎいそぎ名なをつけ奉たてまつる。月満御前つきまろごぜんと申まをすべし。其上そのうへ、此國ぬしの主八幡大菩薩は
 うづきか卯月八日にうまれさせ給たまふ。娑婆世界さばせかいの教主しやくそん釋尊しやくそんも、又卯月八日に御誕生なりき。
 いまどうによ今の童女、又月は替れども、八日にうまれ給ふ。釋尊、八幡のうまれ替りとや申さ
 ん。日蓮は凡夫なれば能よくは知しらず。是併これかし、日蓮が符ふを進まゐらせし故也ゆゑなり。さこそ父母ふぼも悦よろこび
 給たまふ。覽らん。誠に御祝として、餅、酒、鳥目一貫文くわんもん送おくり給たまひ候きり。畢これ。是また、
 御本尊ごほんぞん十羅刹じうしやくに申上のたまて候。今日佛けふのほとけ、生れさせまします時に、三十二の不思議あり、
 此事このこと、周書異記しうしよいき云文いふみにしるし置おけり。釋迦佛は誕生したまひて七歩し、口みづかちを自開
 いて、天上天下唯我獨尊てんじやうてんかゆゑがどくそん、三界皆苦我當度がいはいくがたうど。之この十六字を唱となへ給ふ。今の月滿御
 前は、うまれ給ひてうぶごゑ（初聲）に南無妙法蓮華經と唱へ給ふ歟。法華經云、諸し
 法實相よほふじつさう。天台てんだい云い、聲爲佛事等云々せいゑふつじとうんぬん。日蓮又かくの如く推し奉たてまつる。たとへ
 ば雷いかづちの音おと、耳みみしい（聾）の爲に聞くことなく、日月の光り目くらのために見る事ことなし。
 定さだめて、十羅刹女じうしやくぢよは寄より合あひてうぶ水みづ（生湯うぶゆ）をなで養やしなひたまふらん。あらめでたや、
 あらめでたや。御悦ごえつび推量申候
 次の年つきまろごぜんに、月滿御前つきまろごぜんに經王御前きやうわうごぜんといふ妹が出來たが、この時は、もはや佐渡へ遠
 く流されてゐた。

この日眼女が三十三の厄除けに釋尊の像を造立供養したので、それに關しては、

——厄といふは、たとへば骰子に廉があり、柁には角があり、人には關節、方には四維のあるごとく、風は方より吹けば弱く、角よりふけば強く、病は内より起れば治しやすく、節より起れば治しがたし。家には垣なければ盜人入り、人には咎あれば、敵の便となる。厄といふのはそんなものだ。家に垣なく、人に病があるやうなもので、守らせれば盜人もからめとるであらうし、關節の病も早く治せば命は長いであらう。

そも女人は、一代五千卷、七千餘卷のどの經にも佛になれないと厭はれてゐるが、法華經ばかりには女人佛になると説かれてゐる。日本國は女人の國といふ國で、天照

大神ともふす女神の築きいだされた島である。この日本には、男は十九億九萬四千八百二十八人、女は廿九億九萬四千八百三十人の、この男女がみんな念佛者で、みんな阿彌陀佛を本尊としてゐるから、現世の祈りもその如く、釋尊の像をつくつたり、繪にしても、彌陀の淨土へゆくために釋尊を本意としない。日眼女は今生の祈りのやうだが、教主釋尊像を造られたから後生成佛であらう。二十九億九萬四千八百三十人の女の中の第一の女人であると思はれよ。

念佛まをせば極樂へ——處生苦しよせいくを諦あきらめて、念願は一日も早く彌陀みだの淨土じやうどへ引き取つてもらひたいといふのが念佛衆ねんぶつしゆであるなら、穢土厭離ゑどおんり、寂滅じやくめつ爲樂つあらくの思想は現世否定である。筆者は佛教のことは、その絲口も知らないのだが、そんなふうはこの終りの方の文を解釋すると、前の方の關節ふしから起る不治の病も、早く治療すれば命は長いとの教へが適切に響いてくる。

これだけの抜き書きの中からすらも、女性を無知のものとして眼をつぶらせて、何事も耐忍がまんせよといふのでなく、よく生きよと教へられてゐるのがたふとい。

ある折の日眼女にょにんへは、

——女人にょにんは、たとへば藤のごとし、をとこは松のごとし、須臾しゆゆもはなれぬれば立ちあがる事なし。はかばかしき下人げにんもなきに、かかる亂みだれたる世に、此この殿とのをつかはされたる心こころざし、大地たいちよりもあつし、地神ちじんもさだめてしりぬらん。虚空こくうよりもたかし。

といはれたのは、鎌倉が騒がしいのに、大概の女ならば、夫のそばを離れたがらないであらうし、夫を手許から離したく思はないであらうに、金吾殿をよくよこしてくれた、日蓮を思つてくれるは法華經を守つてくれるのだと述べられたのである。

建治二年三月、下總中山、富木入道どきにふだうの妻の尼御前には

——矢の走^やることは弓の力、雲のゆくことは龍のちから、男のしわざは女の力なり。
 いま富^{どき}木どの、これへおわたりある事、尼^{あまごぜん}御前の御力なり、けぶりをみれば火をみる、
 あめをみれば龍^{りう}をみる。男を見れば女を見る。今富木どのに見^げ参^{さん}つかまつれば、尼^{あま}ご
 ぜんをみたてまつるとをばう。富^{どき}木どのの御^{おんもの}物^{もの}がたり候は、このはわ(母)のなげ
 きの中^{なか}に、りんずう(臨^{りんじう}終)のよくをはせしと、尼^{あま}がよくあたり、かん病^{びやう}せし事^{こと}の
 うれしさ、いつの世^よにわするべしとおぼへずとよろこばれ候なり。何よりもおぼつ
 かなきは御^ご所^{しやう}勞^{らう}なり。かまへて、さもと、三年^{みつとせ}のはじめのごとくに、きうぢ(灸^{きうぢ}治)
 させたまへ。病^{やまひ}なき人も無^{むじやう}常^{やう}まぬかれがたし。但^{たゞ}し、としのはてにあらず法^{ほけきやう}華^け經^{けい}
 の行^{ぎやう}者^{じや}なり。非業の死にはあるべからず。
 と諭^{さと}されてゐる。これは富^{どき}木^{じやう}常^{やう}忍^{にん}入^に道^{だう}が母の骨^{こつ}をもつて、身延にゆき、日蓮上人に
 母死去のせつ妻の尼^{あまごぜん}御前がよく世話したことや、妻が病氣がちだった事をはなしたので書
 かれたものと見える。治^ぢする病ならば癒^{なほ}して、よく生きなければいけないといはれてゐる
 のだ。つぎの「衣食御書^{いしよくごしよ}」となへられてゐるのを見れば一層その趣意がよくわかる。
 これもおなじ人ではないかもしれぬが、尼^{あまごぜん}御前へ與へられたものだ。

てうもく たねみをはんぬ
 鷲目 一貫給畢。

それ食は、色を増し、力をつけ、命を延ぶ。衣は、寒さをふせぎ、暑を支え、恥をかくす。人にもものを施する人は、人の色をまし、力をそへ、命を續ぐなり。

これだけの短かい手紙だが、よく讀むと、衣食の足らねばならぬことと、生命のたつとさを教へ、他人も我もおなじく、衣食が足らなければならぬを悟らし、生きることを示された、短文ではあるが意味深い書簡で、布施とか、慈善とかいふことの本義が、ウンと一聲、活を入れられたやうに響く。今の世にも生きて響くたいした手紙ではないか。

（平凡社「手紙講座」巻の三・昭和十年四月一日）

青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

初出：「手紙講座 巻の三」平凡社

1935（昭和10）年4月1日

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2008年12月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

尼たちへの消息

——よく生きよとの——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 長谷川時雨

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>